

かすかな床下の、塵の揺れる音までも聞えてきて、僕の神経をいらだたす。情欲も食欲も睡眠欲も、そんな大ざつばなものは、體外へ飛散して、もぬけのからとなつたやうだ。

姉が呼んだのか、女は又臺所の方へ行つて来るからと言つた。

女を柱へしばりつけておく譯にも行かない。

僕は無暗と觀音經をやり出した。

聲でトリコにして女の體を包もうとでもするものゝ如く。五分経つても十分経つても、女が部

屋へ戻つて來ないので、殊更ダミ聲を擧げて漏斗を鳴らしたのだ。

すると話し聲で女が、たしかに歸つて行つたなと感づいた。

よし絶望だ。

僕は裏切られたものゝ怒りに燃えた。

起き上つて僕は布団の上に坐つて、一心によろめく心を制御した。

海に漁船を幾そうもならべて、僕の家の窓の下邊りで、漁師が、えんやとれまいたと網引をし